(19)日本国特許庁(JP)　(12)登録実用新案公報(U)　(11)実用新案登録番号
実用新案登録第3097099号
(U3097099)
(45)発行日　平成16年1月15日(2004.1.15)　(24)登録日　平成15年7月30日(2003.7.30)

(51)Int.Cl.[7]　F I
B65F　1/10　B65F　1/10

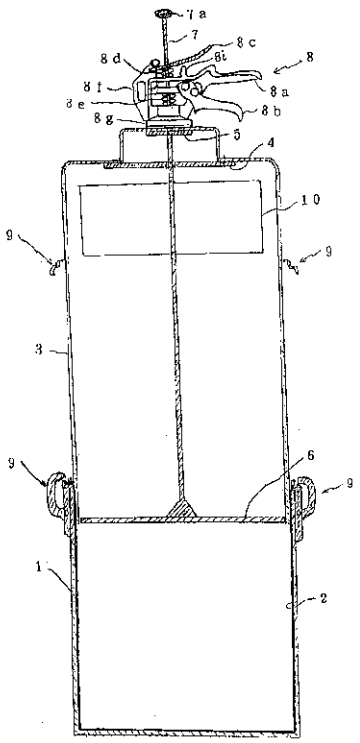
評価書の請求 未請求　請求項の数 1　書面　(全 5 頁)

(21)出願番号　実願2003-2791(U2003-2791)
(22)出願日　平成15年4月10日(2003.4.10)

(73)実用新案権者　503179551
隈部　佐和子
長崎県南高来郡有家町山川７２１番地
(72)考案者　隈部　佐和子
長崎県南高来郡有家町山川７２１番地

(54)【考案の名称】圧縮機能付きごみ箱

(57)【要約】
【課題】家庭やスーパーなどにおけるごみ箱の中のごみを圧縮して、より大量にごみを収納できるようにするごみ圧縮器及びごみ圧縮器付きのごみ箱に関し、ごみ箱にごみを入れた状態において、ごみを圧縮してその容積を減らすことで、ごみ箱やごみ袋の収容量を増やすと共にごみ袋の使用数量を減らせることを目的とする。
【解決手段】外箱と内箱との間にごみ袋を収納し、内箱の上方にあけられたごみ入れ口からごみを投入する。ごみがある程度嵩張ると、手動の圧縮機構で、ごみ上面にある押え板を押え棒を介してごみを圧縮する。数回の圧縮で圧縮ごみがごみ入れ口の高さまで来ると、内箱を外箱の上方にあげ圧縮ごみの詰まったごみ袋を取り出す。
【選択図】　図１



【実用新案登録請求の範囲】
【請求項１】
外箱と、同外箱に収納されたごみ袋とスライドし上部にごみ入れ口を設けた内箱と、上記内箱に遊嵌された押え板と、上記押え板とほぼ直角に固定された押え棒と、上記押え板を上下動させる圧縮機能と、上記押え棒を摺動させかつ固定させるレバーと、上記外箱と上記内箱とをロックするロック機構と、から構成されることを特徴とする圧縮機能付きごみ箱。
【考案の詳細な説明】
【０００１】
【考案の属する技術分野】
本考案は、家庭などにおける小型のごみ箱、スーパーの入口やファーストフード店舗などに設置されている大型ごみ箱において、ごみ箱の中にごみを圧縮して、より大量にごみを収納できるようにする圧縮機能付きごみ箱に関するものである。
【０００２】
【従来の技術】
従来、ごみ箱にナイロン類のごみの形状が立体になった物（例えばタマゴのパック、豆腐の容器など）を入れると、ごみ袋にたくさん入っていないのにごみ箱が一杯になってしまう。その結果、ごみ箱の消費量も増えている。また、高層の住宅やオフィスなどでは、多数のごみ袋をごみ置場まで運搬しなければならず、その作業の負担も大きい。
更に、ファーストフード店舗などに設置されているごみ箱では、嵩張っているものが多く直ぐにごみ容器が一杯になってしまう欠点があった。
その為、作業員は頻繁にごみ袋を交換する必要があり、ごみ袋の数も多く非効率的であった。
【０００３】
【考案が解決しようする課題】
このように、ごみ袋の消費量が増え、またそのごみ袋を運搬するのに多大の労力を要していたので、ごみ袋の消費量を低減することが要求されていた。
【０００４】
【問題を解決するための手段】
本考案は、上記課題を解決するために考案されたもので、外箱と、同外箱に収納されたごみ袋とスライドし上部にごみ入れ口を設けた内箱と、上記内箱に遊嵌された押え板と、上記押え板とほぼ直角に固定された押え棒と、上記押え板を上下動させる圧縮機能と、上記押え棒を摺動させかつ固定させるレバーと、上記外箱と上記内箱とをロックするロック機構と、から構成される圧縮機能付きごみ箱である。
【０００５】
【実施例】
図１乃至図４は、本考案の実施例を図示するものである。
図１乃至図４において、１は外箱、２はごみ袋で外箱１の内壁に密着する形で設けられている。３はごみ袋とスライドする形で設けられる内箱で、同内箱３の上面は上方にＵ字型に突出している。４、５は内箱３の上面に取付けられた固定板である。６は圧縮板で内箱３に若干の間隔を有するように設けられ、同圧縮板６の中心部には上方に押え棒７が直角に固定されている。なお、押え棒７は固定板４、５の中心部、内箱３の上面の中心部及び圧縮板圧縮機構８（以下、圧縮機構という。）の中心部を貫通しており、上端部にはゴム製の押え板７ａが設けられている。
【０００６】
圧縮機構８は、固定把手８ａ、圧縮レバー８ｂ、スットパー兼開放レバー８ｃ、上部スプリング８ｄ、下部スプリング８ｅ、ホルダー８ｆ、支持部材８ｇ、スットパー兼開放レバー８ｃの固定用突出杆８ｈ、スットパー兼開放レバー８ｃ用のスットパー８ｉで構成されており、スットパー兼開放レバー８ｃには押え棒７が貫通する丸穴８ｊがあけられている。９は外箱１と内箱３とを保持するロック機構で、必要に応じてロック機構９は内箱３の

固定部から開放されるようになっている。１０は内箱３の上部に開口されたごみ入れ口である。

【０００７】

このように構成された実施例において、まず図１に示すように外箱１にごみ袋２を装着し、ついで内箱３をスライドさせて入れ左右をロック機構９でロックする。

次に、スットパー兼開放レバー８ｃを水平にして押え棒７を押え板７ａの下面に手をそえて持ち上げる。この場合、図４に示すようにスットパー兼開放レバー８ｃが水平なためレバー８ｃに設けられている丸穴８ｊが水平になっているので、押え棒７の外周は遊嵌状態になりスムーズに持ち上げられ、圧縮板６がごみ入れ口１０の上端部以上に持ち上げられる。

ここで、レバー８ｃを上方に持ち上げると、レバー８ｃの丸穴８ｊが水平面でみれば狭くなり、図４に示すように、その為押え棒７の外周面とレバー８の丸穴８ｊの内周面とが接触するので、押え棒７ひいては圧縮板６の落下を防ぐことが出来る。

【０００８】

ごみ入れ口１０からごみを入れ、ごみがごみ入れ口１０の下端部付近まで嵩張ってくると（図２）レバー８ｃを水平にして圧縮機構８の固定把手８ａを親指で持ち上げ圧縮レバー８ｂを他の指で上方に持ち上げると、上部・下部スプリング８ｄ・８ｅ作用と丸穴８ｊが傾斜して押え棒７を丸穴８ｊの角で下へ押し下げ作用とによって、圧縮板６は下方に移動する。この行程を繰り返すことによってごみは圧縮されてしまい、図３に示すようにそれ以上圧縮出来なくなってくる。

少し時間をおきレバー８ｃを水平にして押え棒７を持ち上げ、ごみ入れ口１０の上端部以上に持ち上げ、更にごみをごみ入れ口１０から投入し、ごみが嵩張っら上記の方法でごみを圧縮する。

【０００９】

このような操作を繰り返して、ごみが圧縮してもごみ入れ口１０の下端部付近になったら、両サイドのロック機構９のロック取り外し、圧縮レバー８ｂを作動して内箱３を上方に抜く。

内箱３を抜いたらごみ袋２の口を塞ぎ、ごみ袋２を取り出し、次のごみ袋２を外箱１に挿入する。

なお、図４は、押え棒７とレバー８ｃの丸穴８ｊとの関係を示すものである。

【００１０】

【考案の効果】

本考案に係る圧縮機能付きごみ箱には、次の効果が得られる。

（１）ごみ箱中のごみが圧縮されるので、大量のごみを圧縮して、その容積を小さく出来、その結果ごみ箱やごみ袋の収容量を増やすことが出来る。

（２）したがって、ごみ集積場にごみ袋を運ぶ頻度も減少し、作業が楽になる。また、ごみ収集場所に出しておくごみ袋の数も減り、ごみ袋の消費数量も減少する。

（３）家庭から出されるごみ袋の数が少なくなり、ゴミステーションの空きスペースも確保出来る。

【図面の簡単な説明】

【図１】本考案に係る圧縮機能付きごみ箱の側断面図である。

【図２】本考案に係る圧縮機能付きごみ箱の作用説明図である。

【図３】本考案に係る圧縮機能付きごみ箱の作用説明図である。

【図４】本考案に係る圧縮機能付きごみ箱の部分拡大図である。

【符号の説明】

１・・・外箱

２・・・ごみ袋

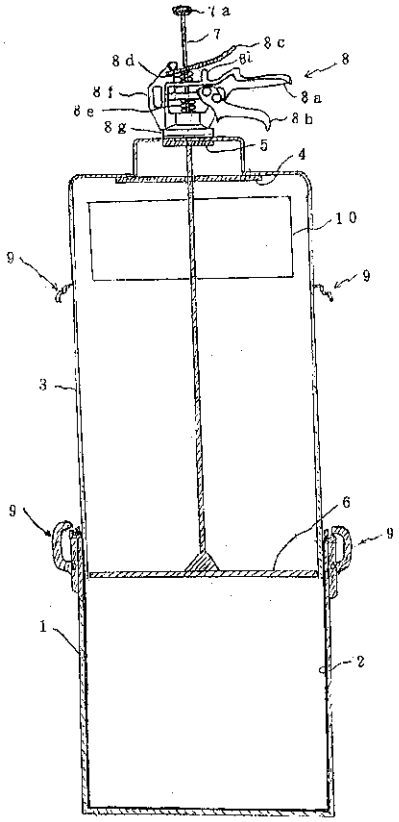
３・・・内箱

４・・・固定板

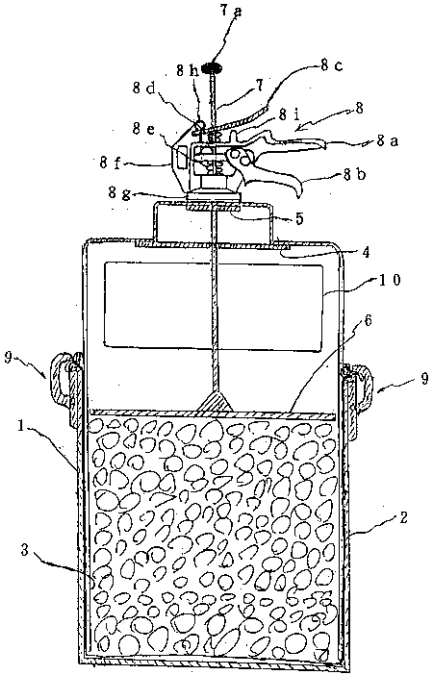
５・・・固定板

６・・・圧縮板
７・・・押え棒
７ａ・・・押え板
８・・・圧縮機構
８ａ・・・固定把手
８ｂ・・・圧縮レバー
８ｃ・・・スットパー兼開放レバー
８ｄ・・・上部スプリング
８ｅ・・・下部スプリング
８ｆ・・・ホルダー
８ｇ・・・支持部材
８ｈ・・・固定用突出杆
８ｉ・・・ストッパー
８ｊ・・・丸穴
９・・・ロック機構
１０・・・ごみ入れ口

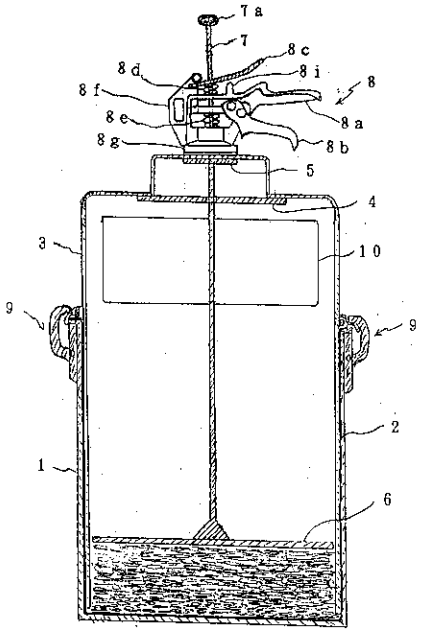
【図１】



【図２】



【図３】



【図４】

